

FLORA KANAGAWA

Nov. 20. 1997 No. 45

神奈川県植物誌調査会ニュース第45号

〒250 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

振替 00230-5-10195



イワユキノシタ. 奥湯河原の藤木川源流にて(1997年5月19日, 勝山輝男氏撮影).

山田文雄: アレチキンギョソウの発見	496
金子紀子: ジョウシュウカモメヅル(ガガイモ科)を見つけて	496
長谷川義人: ヤブムグラの栄養繁殖について	500
佐々木あや子: 丹沢山塊のナベワリ	502
勝山輝男: 忘れ物	502
勝山輝男: 湯河原の植物調査(1)	502
勝山輝男: 芦ノ湖にヒロハノエビモ(ヒルムシロ科)が健在	503
山崎泰子: 横浜市内のタシロラン	503
野津信子: トゲオナモミ	504
田中一雄: アマガイノデ	504
田中一雄: コケミズ	506
奥津均: ヌマツルギク・続報	506
編集後記	506

アレチキンギョソウの発見

(山田文雄)

1997年5月21日、横浜市神奈川区出田町ふ頭の貨物線の脇で、高さが人の膝ぐらいで、全体がカワラマツバ(アカネ科)に似て、桃色の小さな花をつけている植物が目に入った。花の形はゴマノハグサ科のウンランに似ているが、色と大きさからカラスノエンドウにも似ているように思えた。採集したものを勝山輝男先生に見ていただいたところ、ユーラシア大陸に分布するゴマノハグサ科のアレチキンギョソウ *Antirrhinum orontium* L. であると教えていただいた。

国内では1959年に名古屋で初めて採られた記録がある(久内1961)。その後、1970年に三重県小俣で(太田1985)、また1978年に静岡県清水港で(植村1984)採集されている。本県では新産品である。アレチキンギョソウは線路に沿って数メートルにわたりまばらな小群落を作っていた。そこに



アレチキンギョソウの花。19**.*.*撮影。

は、他の植物はあまりなく、周辺にシマズメノヒエの大株とアオスゲ、ネズミムギ、スズメノエンドウなどが、わずかに点在していた。採集する際に、手に持った茎を傾けると、実におびただしい細かい種子が、果実の穴からこぼれ出てきた。本種の果実はヒヨコに似ていて、それが直立する茎の葉腋ごとについているのは、特徴的である。また、花卉の色が白色に近いものが幾株か見受けられた。各部分の特徴は右図のとおりである。

文 献

- 久内清孝, 1961. 名古屋中心の外来雑草. 植物研究雑誌, 36: 380-383.
植村修二, 1984. 清水港に帰化したアレチキンギョソウ. レポート日本の植物, (22):13.
太田久次, 1985. 三重県帰化植物誌, 149pp. ムツミ企画.

ジョウシュウカモメヅル(ガガイモ科)を見つけて

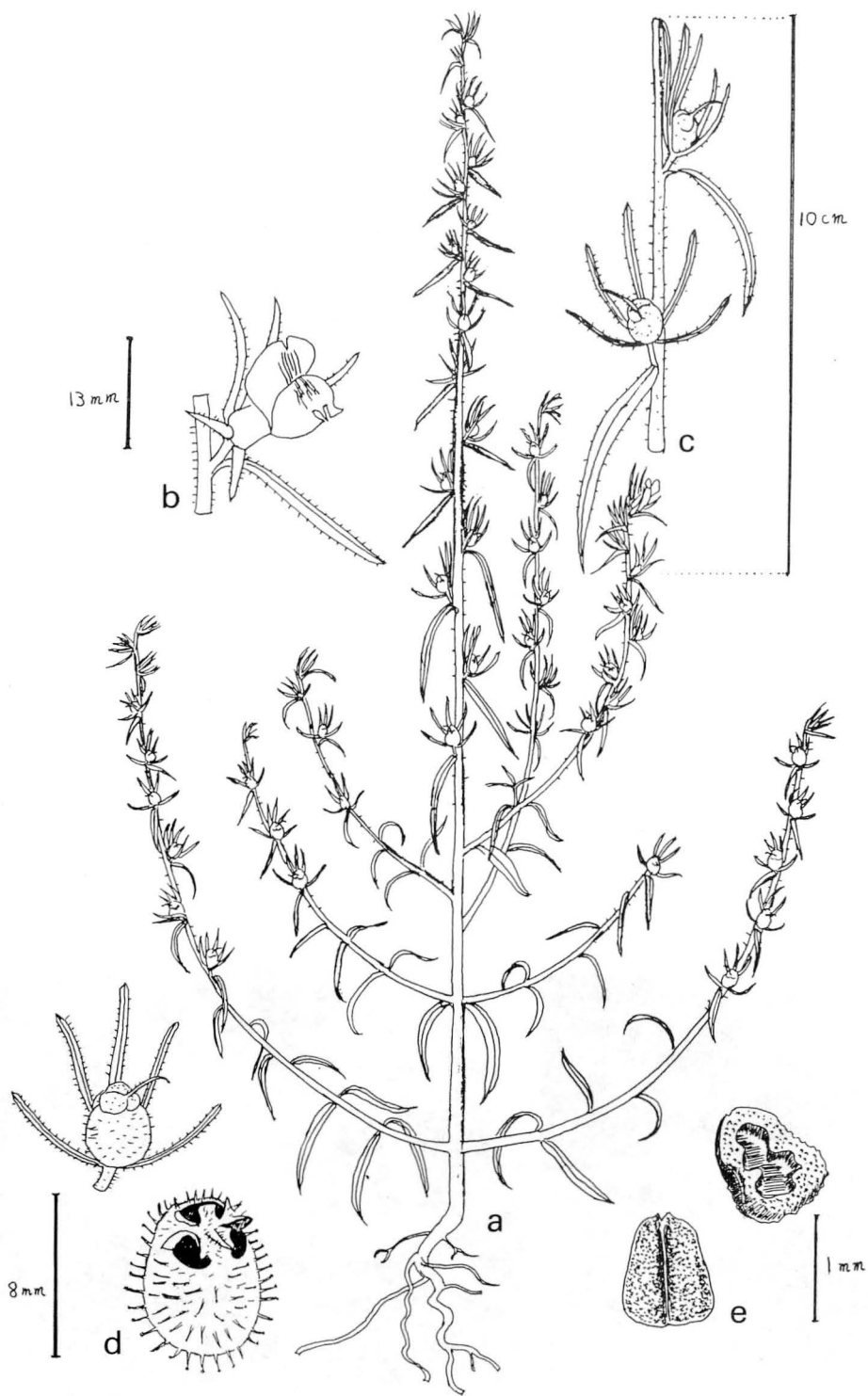
(金子紀子)

はじめに

ジョウシュウカモメヅル *Cynanchum sub lanceolatum* (Miq.) Matsum. var. *auriculatum* (Franch. et Sav.) Matsum. は「神奈川県植物誌1988」に「箱根を基準産地とし、コバノカモメヅル var. *sub lanceolatum* より葉の先が長く鋭く尖り、花が12-20mmと大きいものだが神奈川県植物誌や文献には顔を見せず今回の調査でも確認していないので再検討を要する」と記載されている。筆者が1997年9月3日に採集したものがジョウシュウカモメヅルであったのでその経過を報告する。

生育地について

横浜市金沢区にある称名寺の裏手に散策路で二分されたアシ原がある。数年前からそのアシ原の中にコバノカモメヅルが1株あるのは知っていたが、1997年5月31日に散策路をはさんだ反対側の草地の中にコバノカモメヅルに似たものが8株あるのに気がつい



アレチキンギョソウ. a: 全体, b: 花, c: 花序, d: 果実とその開口部, e: 種子.

た。その場所は数年前までは湿地で春先にはセリが生え、数多くの人がセリ摘みに訪れていた。夏になるとヨシが生い茂り、秋にはミゾソバがヨシの隙間に咲き乱れていた。

ところが1995年くらいから、あまりにも多くの人が根こそぎに持っていくためにセリが減り、踏圧のためか陸化が進み、ヨシがススキに代わりはじめていた。1997年初夏にそのススキを敷き藁代わりに刈り取った人がいて、急に明るくなった草地にコバノカモメヅルなどが目立つようになったものと思われる。

ジョウシュウカモメヅルとの出会い

8株のコバノカモメヅルらしいものは、7月中旬から花が咲き出した。8株のうち暗紫色の花が付いたものが6株、白色の花のものが1株、花の中央部だけが紫であとは汚白色のものが1株あった。これらすべての花径を計ったところ1.2~1.5cmであった。まれに2.0cmのものも数輪咲いていた。これらの標本及び写真を高橋秀男先生に送り同定していただき、コバノカモメヅル、アズマカモメヅル var. *albiflorum* (Franch. et Sav.) H.Hara, アズマカモメヅルの品種であると判明した。

その後さらにコバノカモメヅル5株、アズマカモメヅルの品種2株を見つけた。草むらを丹念に探せば更に多くの株が見つけれられると思う。称名寺のものは、円海山のコバノカモメヅルに較べると花径が大きいことが気になり、その後も通い続けていたが、コバノカモメヅル、アズマカモメヅルなどの花期が終わりに近づいた9月3日、今まで葉ばかり茂っていた株が開花していた。その株は、花色は暗紫色であったが一見しただけで明らかなほど一輪ずつの花が大きく、花の集まりも直径4cmくらいの球状で、ボリュームがあり、今までに見たものとは違うという印象を受けた。花径を計ったところ1.8~2.0cmあり、ずい柱の大きさは他のものと同様で、花被片が長かった。葉の形はコバノカモメヅルの葉先の尖り方に較べるとなめらかに細まっていた。葉は大きく3×15cmあり、色は濃緑色で、両面に短毛が生えていてざらついた。葉の大きいものも小さいものも、基部は浅く心形にくびれていた。花柄、小花柄には長い白毛がはえていて肉眼でもはっきり見えた。標本の同定を高橋先生にお願いしたところジョウシュウカモメヅルであった。「葉幅やや広く長卵形をなし基脚



ジョウシュウカモメヅル，1997年9月3日，称名寺で撮影。

表1. コバノカモメヅル類の形態変異(調査日 1997.7.15-9.20)

	種名	花色	花径 (cm)	花柄 (cm)	花序(葉身 との比較)	葉柄 (cm)	葉身 (cm)	花柄の 毛
1	コバノカモメヅル	暗紫色	1.5-1.7 まれに2	2-3	2/3-1.5倍	0.5	1.5×5 0.9×3	少ない
2	コバノカモメヅル	暗紫色	1.5-1.7 まれに2	2-3	2/3-1.5倍	0.5	1.5×5 0.9×3	少ない
3	コバノカモメヅル	暗紫色	1.8	0.5-1.5	2/3-1.5倍	1.2-1.5	2.5×11	無し
4	コバノカモメヅル	暗紫色	1.2	2-3	2/3-1.5倍	0.8	2×5 1.5×61.5	有り
5	コバノカモメヅル	暗紫色	1.2	2-3	1/2-1/3	0.5-0.8	1×3.5 1.5×5.5	有り
6	コバノカモメヅル	暗紫色	1.5	2-3	1/2以下	0.5	2.5×11	有り
7	コバノカモメヅル (円海山尾根道)	暗紫色	0.7-1.2	2.5	1-1.5倍	0.5	1.3×5	無し
8	コバノカモメヅル (円海山尾根道)	暗紫色	0.7-1.0	2.1	1/2-2/3	0.7	1.4×6 1.4×7	有り
9	コバノカモメヅル (円海山尾根道)	暗紫色	0.7-1.0	2.5	1/2-2/3	0.5-0.7	1.4×6	無し
10	アズマカモメヅル	黄白緑色	1.0-1.4	2-3	2/3-1.5倍	0.7-1.5	0.7×1.5	有り
11	アズマカモメヅルの品種	中央のみ 紫の白花	1.0-1.5	2-3	1/2-2/3	0.5-1.0	2.5×11	有り
12	アズマカモメヅルの品種	中央のみ 紫の白花	1.0-1.5	2-3	1/2-2/3	0.5-1.0	2.5×11	長い
13	ジョウシュウカモメヅル	暗紫色	1.8-2.0	4	1/2-2倍	0.5	1×3 3×15	長い

湾入し両面に毛があり花梗と小花梗とには先に向かう長い密毛がある。花は大きく濃紫色である」(中井, 1937)という説明に合致していた。

9月20日現在, ジョウシュウカモメヅルは満開状態で実が付き始めているものもある。袋果はコバノカモメヅルに酷似し, 初期はみずみずしい黄緑色, やや成長したものは粉を吹いたような緑色で, 0.8×6.5cmあった。ジョウシュウカモメヅルはコバノカモメヅルよりも8mほど北側, 林縁からは15mほど離れた所に生えていた。

称名寺で観察したすべての株に共通することは以下のとおりである。

(1) 小花柄の内の一本が長く伸び, その先に更に花序を付ける二度伸びしているように

見えるものが半数以上あった。

(2) 花付きはまばらと言われているが(村田, 1994)花は一本の花柄に15から20ついていた。

(3) 袋果は単生と言われているが(村田, 1994)単生のもので双生のものであった。双生のもものは120-160度の角度で開いていた。ただし双生のもものは単生のももの1/4-1/10の割合であり単生のものに較べると少ない。

(4) 結実の割合は少なく, 10花序に1個程度である。実ができ始める頃になると黄色いキョウチクトウアブラムシがびっしりつき, 時には株が枯れるほどになる。そのために種子が完熟できる割合は更に少なくなる。

(5) 茎や花柄, 葉柄などを切ると白い汁が出る。

カモメヅルの仲間の根について

花を咲かせている株の近くに草丈が5cm未満のものを始め多数の実生苗があり、いくつか掘り起こして見たところ次のことが分かった。1年生のものは直径2mm以下の白から薄茶色の根が伸びていてその先端部に細根がついていた。中の2~3本の根は基部が薄紫色をしていた。

草丈が15cm程度のやや大きい苗の根は前年度までに茎が出ていたと思われるこぶ状のものが2個ついていてその先端から今年の茎が出ていた。おそらく3年目の苗であろう。抜き取らずに置いておいたら今年開花しただろうと思う。

草丈が80cmのものは前者より大きいこぶ状のものが3個ついていて5mmくらい離れたところから茎が出ていた。紫色を帯びた根は茎の付け根に多かったがこぶ状のものから短いものが少し伸び始めていた。根の太さも一年生のものに較べるとかなり太く1.5mm程度であった。実生苗のためこの株がどの種類の花を咲かせるものかは不明であるが毎年冬に地上部が枯れるたびにその先から新しい茎を伸ばすようである。

おわりに

称名寺のコバノカモメヅルは花の色が株ごとに微妙に違っている。青みの強い暗紫色、赤みの強い暗紫色、花被片の外側が汚白色から薄い茶色で内側が暗紫色のため陽のあたっている時は茶色を帯びた紫に見えるものなどがあった。アズマカモメヅルの一品種である中央だけが紫の花にも、紫部分が多いもの少ないもの、雌しべが全部白いものと中央部だけ星形に薄桃色のものなど様々な花色を観察できた。また茎や、花柄に毛があるものと無いものがあった。円海山の尾根部の草地にあるコバノカモメヅルに較べ、称名寺のものは花径がやや大きい。この原因としては尾根道とやや湿地という生育環境の違い、海に近いこと、アズマカモメヅル、ジョウシュウカモメヅルが

あるために少しずつ交配して様々な形態が生じたなどが考えられると思う。また今年だけ、称名寺だけの観察から断言するのは時期尚早かも知れないがジョウシュウカモメヅルはコバノカモメヅルよりも1ヶ月以上遅れて開花した。他の場所でコバノカモメヅルを観察された方がその近くに花が咲いていない葉だけの株を見つけられた場合、時間をおいて観察されればジョウシュウカモメヅルが各地で見つかるのではないかと考えている。

謝辞

筆者は全くの素人で、花の大きさや葉の形見た時の印象などしか分からず、自分が見たものが何であるのか決めることすらできなかった。お忙しい中いろいろとご指導下さった高橋秀男先生に深く御礼申し上げる。

参考文献

- 神奈川県植物誌調査会編, 1988. 神奈川県植物誌
1988. 神奈川県立博物館.
中井猛之進, 1937. 植物研究雑誌, 13: 67-75.
村田源, 1994. カモメヅル属. 日本の野生植物III.
pp.39-43. 平凡社.

ヤブムグラの栄養繁殖について

(長谷川義人)

ヤブムグラ *Galium niewiczii* Franch. et Sav. Enum. Plant. Jap. II: 395(1879)はDr. Niewicziiが江戸近郊で採集した標品によってフランシェとサヴァチエの『日本野生植物目録』に新種として発表された。

この種は国や神奈川県レッドデータでも絶滅危惧種に指定されている。分布は神奈川県・千葉県・茨城県・埼玉県・東京都の関東南部地域であって、横浜市内では緑区、青葉区、都築区などにはあるものの、やや稀産する。大和市などに記録がある。

1996年9月29日に筆者は横浜市緑区寺山町の四季の森公園内のヤブムグラ自生地に行き、その生態を観察した。ここは大変に密集した成育地で1株の株基から3~12位の枝



ヤブムグラ

表.

重複標本No.	茎数/株	発根	節数*	
15338			(2条に発根のものは2行)	
-1	10条	なし	-----	(2株状)
-2	6条	あり	16節目	
-3	6条	あり	24節目	新苗
-4	3条	あり	21・22節目	
		あり	20・21節目	新苗
-5	11条	あり	22・23・24・27節目	
		あり	19・21節目	
-6	3条	あり	13節目	
-7	5条	あり	14・15節目	
		あり	13・14・15・16・17節目	
-8	5条	あり	16・17・18節目	

* 株基からの発根部までの節の数

(シューティング)を分けて、先端近くの葉腋からさらに2~6節ある花序枝をだして、時にその節からさらに枝をだして花を着ける。9月は果期で枝条は倒伏して、標本用に丁寧にこの株を掘り挙げたところ先端部が取れずに残るものがあるので、先端部も根掘りを用いて採取したところ、接地したところから発根して、新苗が生育しているものがあった。この状況からみて、ヤブムグラは種子による繁殖の他に栄養繁殖もおこなっていることが、想像できる。なお枝の先端部の茎の直径は0.3mmから0.6mmと細く普通の採取ではすぐ切れてしまう。標本No. 15338(長谷川)のデータを参考までに左下表に示す。

標本は雑種などの心配がないので同一の番号で枝番1~8までの8枝である。

同じ生態のオオバノヤエムグラが同様かどうか筆者には不明である。

追記：フランシエ・サヴァチエの『日本野生植物目録』の頁と発行年は他書の引用と異なる。総覧(1931)、総覧補遺(1936)、集覧(1952)ではII: 393(1876)となっている。筆者は1940年の植物文献刊行会(東京)の復刻版によった。小原敬氏によればStafleu et al.では、この書のII: part. 2.の発行年は1878年とされている。(県植誌1988)

(Sep., 9, 1997記)

追記2：本稿と同じ内容の報知が過去にあることを勝山輝男氏から9月11日にお知らせいただいた。調べたところ『野草15巻』No. 9(Dec., 27, 1949発行)木人独語(一)「ヤブムグラの面白い点」檜山庫三にある。

(Sep., 11, 1997記)

丹沢山塊のナベワリ

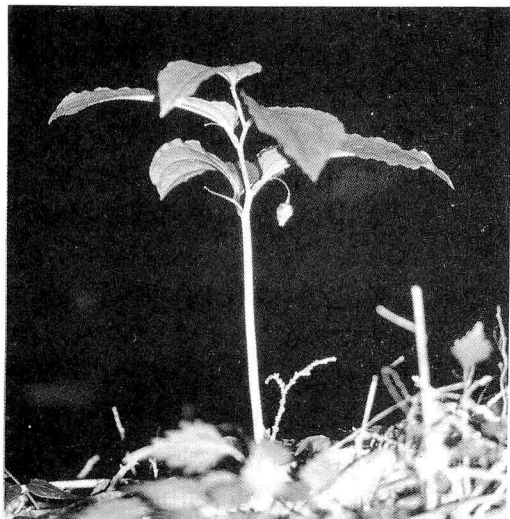
(佐々木あや子)

1997年6月29日、秦野市の表丹沢県民の森登山訓練所付近(秦野-4)で、ナベワリを確認し、写真を撮影したので報告する。

「神奈川県植物誌1988」によれば、ナベワリの分布は、湯河原-2、箱根-5、足柄-1、3の県西部・箱根山塊に限られていた。暖地の林床に生育し、その分布は、本州(神奈川県以西の太平洋側)、四国、九州、奄美大島となっている。

ところが、古く1961年の林業試験場研究報告第133号の「丹沢山塊の植物調査報告」(林・小林・小山・大河原)には、「ナベワリの分布は、関東南部、紀伊半島、四国、九州で、大体平気気温15℃線以南に生じ、丹沢大山は北限および東限地のようである。丹沢山塊では、大山のほか、札掛、幽神、世附にまれに生じるにすぎない。」と記載されている。すなわち1961年頃には、丹沢山塊でもその分布が確認されていたことになる。

しかし、それ以後、1979年から1988年までの神奈川県植物誌の調査、1993年から1995年までの丹沢・大山自然環境総合調査でも、丹沢山塊では生育が確認されてい



ナベワリ

かった。今回の秦野-4での確認は、この地がナベワリの分布の北限および東限地になるが、さらに調査を進めれば、かつての分布地である大山での再発見も期待できるかもしれない。

忘れ物

(勝山輝男)

先日、植物採集ニュースのバックナンバーをながめていたところ、90巻の68ページ(1977年)に、次の2種の神奈川県への帰化の報告が目にとまった。どちらも「神奈川県植物誌1988」ではふれられていない種類である。「神奈川県植物誌1988」では標本に基づく分布図を作成するため、標本整理に多くの時間を費やした。反面、文献のチェックがおろそかになり、忘れ物がいくつかできてしまった。他にも同様のケースがあるものと想像される。気がついたらその都度、忘れないうちにFLORA KANAGAWAに載せておこうと思う。

フランスゼリ *Bifora tecticulata* (L.) DC.

1976年5月に森茂弥氏が横浜市中区山下埠頭の道床で採集され、同誌でセリ科の日本新産帰化植物として発表された。標本は国立科学博物館に収められているという。

ヤンバルツルマオ *Pouzolzia zeylanica* Wedd.

これも森茂弥氏が1976年5月に横浜市中区神奈川区出田町の埠頭で採集された。初島住彦氏に標本を送り、ヤンバルツルマオと同定されたという。別名ツルマオモドキ。伊豆青ヶ島、奄美、沖縄、台湾、熱帯から亜熱帯に分布するイラクサ科植物で、神奈川県には記録がなかった。これも国立科学博物館に標本が収められているらしい。

湯河原の植物調査(1)

(勝山輝男)

県立博物館の自然系が小田原に移るのにあわせて、長年住み慣れた横浜市緑区を去



ミヤコイヌワラビ

り、湯河原町に移住した。今回の植物誌調査では湯河原町、真鶴町、小田原市の根府川側などを担当地域として歩くことになった。前回の植物誌調査で採集された標本リストをもとに、普通種はメモでチェックし、稀産種は前回の産地の再確認を行ってきた。里道を憶え、土地感ができるにつれて、成果もあがってきたので、その一部を報告する。

イワユキノシタ *Tanakaea radicans* Franch. et Sav.

神奈川県では箱根須雲川に1個所産地が知られていた。今回、湯河原側でも藤木川源流の岩場に見出すことができた。湿った岩にイワタバコやイヌカタヒバナなどとともに3m²ほどの範囲に群生していた。オーバーハングした岩の上で、手が届かず3mほどの棒を使って1株だけ落とすことができた。本号の表紙写真は付近の岩に置いて撮影したものである。

ミヤコイヌワラビ *Athyrium fragulum* Tagawa

植物誌1988の調査では見出されず、県内からは失われたものと考えられていたが、1995年に田中一雄氏が南足柄市で採集され、FLORA KANAGAWA No. 42 で30数年ぶりの再発見を報告されている。湯河原では1950年代に採集された標本が県博に残されているが、その後の消息は不明になっていた。今年7月14日に湯河原パークウェーに近い藤木川の源流で、10月13日に静岡県境に近い千歳川の上流域で見出した。どちらも放棄されたワサビ田が近くにあり、沢筋の水の豊富な岩の間に生えていた。

芦ノ湖にヒロハノエビモ(ヒルムシロ科)が健在

(勝山輝男)

ヒロハノエビモ *Potamogeton perfoliatus* L. は、神奈川県植物目録(1933)や神奈川県植物誌(1958)に鎌倉・箱根とあり、県博に1926年に沢田武太郎が芦ノ湖で採集した標本が残されている。しかし、その後の記録がなく、絶滅したものと考えられていた。箱根町の中村和義氏が1996年8月6日に芦ノ湖西岸の白浜近くの岸に打ち上げられているのを採集され、芦ノ湖に健在であることが確認された。

横浜市内のタシロラン

(山崎泰子)

1997年6月29日、横浜市栄区公田町の丘陵の林床において、約20数本の腐生植物を見た。全体が白色で白カビが付着し、白さが際立っていた。茎は直立、総状花序を頂生、最上部の花は上向きのもが多く、下方にいくにしたがって下向き(下垂)であった。根茎は、楕円状の球で中は空洞のような感じで、外側はやや固く鱗片がある。高さは10~30cm強ぐらい。図鑑で調べるとタシロラン *Epipogium roseum* Lindl. の特徴と一致している。しかし、分布の点で気になり

確信が持てなかった。多くの図鑑によれば、分布の北限は関東地方南部とある。また、神奈川県植物誌1988では、発見されていない。

1997年8月17日、植物誌調査横浜ブロックの研修会に標本を持参し、高橋秀男先生と林辰男先生に同定していただき、タシロンと判明した。暖地の林床に見られ、種子がきわめて軽く風に乗って広く散布されるとあり、地球温暖化が問題となっている昨今においては、他の地域へと分布が拡大する可能性もありえるのではなからうか。毎年咲くとは限らないとのことなので、発見場所を引き続き観察していきたいと思う。

トゲオナモミ

(野津信子)

9月18日、この4月に開通した都市計画道路、桂町戸塚線(横浜市栄区小菅ヶ谷町)の歩道の植樹柵のツツジの植え込みが見えないほど野草が生い茂っている中に、やや白っぽい見慣れない草を一本見つけた。それが、トゲオナモミ *Xanthium spinosum* L. であった。草丈約1m、幅も1m位に分枝し、刺だらけで一枝折るのも苦労した。各葉腋に3岐した15mmの鋭い刺と1個ずつの果包が、各枝の先にはオナモミに似た数個の雄花がついていた。



トゲオナモミ

アマギイノデ

(田中一雄)

1995年2月18日(晴)、南足柄市苧野の沢に沿った林道脇の斜面を登ったり下ったりしながら観察して行きました。エリアはMIA-3です。寒さの最中なので見られるシダの種類も量も少ないのですが、灌木が落葉しているので見通しがよく歩きやすいのが冬のよさでしょう。

マツザカシダの大群生地がありましたので、その周辺にたくさんあるオオバノイノモトソウとの雑種があるかどうか眼をこらしましたがやはり見当たりませんでした。マツザカシダとイノモトソウの雑種はすでに発見されてヌマズイノモトソウと名前が付いていますが、オオバノイノモトソウとの雑種はまだ発見されていないので、あるいはと思って捜したのですが、これだけの群生地でもみつからないのはやはりアボガミー同志の両親からの雑種は出来にくいのでしょうか。標高300mほどの北に面したスギ林床の緩い斜面に、イノデとイノデモドキの混生地がありました。このような混生地では両者の雑種のアマギイノデがあるかどうか必ずチェックするのを習慣にしているのですが、いままでに何十回も観察してきたのに、アマギイノデには全く出会ったことがありませんでした。

今回もチェックを始めて十分ほど経ったとき心臓がドキンとしました。群落の中に一株だけ葉のツヤがイノデとは少し違うイノデが眼についたからです。全長1m弱で外観は葉身がやや細くイノデモドキに似ていますがそれより大きく、イノデと同じ大きさなのですが、イノデのようなピカッとしたツヤではなく、葉に厚みを感じさせるような鈍いツヤ。いままでに何回も間違えてがっかりして来たハタジュクイノデに比べて、緑色の色調が少し違って見えました。アマギイノデだとひらめきました。カッ！と頭に血が上り早く採らないと消えてしまいそうな気がして、株もとに跳び込み葉を三枚切り取り、それをポ

リ袋に仕舞い込んで、やっと落ち着きました。それでもまだハタジュクイノデかも知れないと思う気持ちが抜けきれず、地面に座ってジックリと観察してその特徴をノートに記入しました。

帰宅後に参考書、関連標本及び採取してきたアマギイノデ?を揃えて観察を始めました。まずソーラスは冬なのにシュリンクした状態で固着しており、はぜていないので雑種性には違いはありません。葉柄の鱗片は柔らかくてツヤが少なく、やや褐色がかった広披針形～披針形で、下部の鱗片の中には褐色がかっているものもあるが、ボヤッとしていて明瞭ではありません。ルーペで覗くと、縁辺は細裂した歯状の鋸歯で、イノデモドキより重鋸歯は少ないが、イノデよりも重鋸歯が多く細裂が小さい。葉軸の鱗片は披針形でアイアスカイノデより長く柔らかく鋸歯が多い。葉柄も葉軸も鱗片の量が多く地肌が見えないほどである。一方ハタジュクイノデの葉柄の鱗片はやや披針形～狭卵形でツヤがあり、パリッとした感じがアイアスカイノデの影響を感じる。重鋸歯は小さく多いが毛裂はしていない。歯柄下部の鱗片には明瞭に栗色の縞が大なり小なり必ず見られる。葉軸の鱗片は披針形で鋸歯は大きいが出方が粗く質が硬くこれもアイアスカイノデによく似ています。結局アマギイノデ?とハタジュクイノデとの鱗片の比較で、両雑種の片方の母種イノデモドキの特徴を共有しつつ、なおかつもう一方の親のイノデとアイアスカイノデの影響差が認められました。孢子囊と孢子を検鏡すると、まず孢子囊は球状に熟しておらず太鼓形のまま、中に孢子がほとんど入っていません。少ない孢子も定形が見られず、ほとんどイレギュラーでした。これは雑種性シダの特徴です。葉身上中部の裂片に付着する孢子の位置はイノデより外側ですがイノデモドキより内側で、もちろんアイアスカイノデより内側に位置し、どちらかと言えばイノデ的です。葉身下部では辺に寄り、耳片と裂片の上

部優先に着いています。下部羽片で耳片や裂片上部に優先的に着く性質はハタジュクイノデにも見られる特徴で、これはイノデモドキ的です。

葉の色はハタジュクイノデは鮮緑色～帯黄緑色ですがそれよりもやや緑が濃いようです。葉形は長三角形でハタジュクイノデの細三角形と、先端の尾状の伸び方は多少形が違うようです。葉身の幅はアマギイノデ?の方がやや広く、全長もアマギイノデ?の方がやや広い傾向が見られましたが、葉形、葉幅、全長ともこれらはもっと多数を検しないと完全な差は判りません。葉面全体はアマギイノデ?の方が毛深く、ハタジュクイノデはツルツとした感じがみられます。

両者を比較した結果、差異点は鱗片の質、色、形、孢子囊の位置、葉色、葉形、大きさや全体の印象などに、いままで見て来たハタジュクイノデとのに差が認められて、今回発見したイノデはアマギイノデと考えられます。

1995年2月25日(晴)、先週アマギイノデを発見した場所から観察を始め、だんだんと標高を上げ明神林道を越えて矢倉沢の領域、MIA-1の範囲に入って行きました。標高は約450m、胸高径40～50cmのスギが植林されている北向きの斜面で、イノデ、アイアスカイノデ、イノデモドキが混生していました。それらの間から雑種を捜しながら観察して行きますと、ドウリョウイノデがまず眼につきました。濃緑色でひときわ大型なのですぐに判り、比較的できやすい雑種らしく点在しています。ハタジュクイノデがありました。これも大型ですがドウリョウイノデのようにガッシリしていないので判別できますが少ないシダです。おかしいなと感じたシダは葉を裏返して必ずソーラスを見ます。ソーラスがはじけていなければ雑種の可能性が高いのでそのシダ全体を総合的に観察して判別します。二本のスギの間に1mを超す大きなイノデがあり、近寄ってみると株も大きくて葉を20枚

も叢出していました。よく観察すると先週
苧野で発見したアマギイノデと全く同じ印
象でした。2週続けて珍しいアマギイノデを
見つけることができたとは、全くラッキー
としか言いようがありません。ただ苧野の
株はやや弱っている感じのするのが気がか
りですが、矢倉沢の株は元気一杯なので林
が伐採されないかぎり安心です。

帰宅後標本を作成し静岡市の志村義雄先
生に送り同定をお願いしたところ、両方と
も間違いなくアマギイノデですとの御回答
をいただきました。

神奈川県でのアマギイノデは「神奈川県
レッドデータ生物調査報告書 1995 神奈
川県立生命の星・地球博物館」P.52の記載に
もある通り、いままでに報告は少なくまた
それらも再検討の必要がある特異な雑種
で、それが日を追わず二箇所で見つけた
ことは大変幸運なことと喜んでおります。

コケミズ

(田中一雄)

FLORA KANAGAWA No.43のコケミズに
ついて梅木俊子さんの報文を読み、どこか
で見たような気がしていたが、大磯町の我
家の植木鉢や庭にかなり大量に生えていた
ことを思い出し気をつけていた所、5月にな
り庭のあちこちにたくさん生えてきました。
大きいものは全長15cmほどに成長し、
記述の通り葉腋に花をたくさん着けました
が、葉の裏に褐色の点はありませんでした。
日陰の植木鉢の中、置き石の周囲や石
垣の際などを好むようです。気をつけて見
れば各地にあるのではないのでしょうか。

ヌマツルギク・続報

(奥津均)

ヌマツルギク *Spilanthes americana* (Mutis)
Hieron.については、この会報のNo. 40(1995年
6月)に報告してありますが、花の咲く時期に

ついて、新しく書き加えます。

原色日本帰化植物図鑑(長田武正著・保育
社)の記述には、「花期は晩秋～初冬」とあ
り、西山俊治氏の1974年11月の標本が元
になっています。また、当会会員の山田文雄氏
からは1993年11月の採集品について報告があ
りました。さらに、私は1994年12月の採集品
について報告しました。つまり、どの場合も
11月～12月に開花を見ていたわけです。

その後、1996年7月にヌマツルギクの生育
地を訪れたとき、成長の最盛期であり、それ
ぞれの葉腋に頭花がつき、満開でした。冬咲
きかと思われたものが、夏咲きなので来年も
咲くかと期待して1997年7月に再訪しまし
た。期待したとおり、昨年とおなじ満開で、
1メートル四方あたり100個の花を数えまし
た。舌状花も3～9と冬季の頭花と数にかわり
なく、成長期の6月より咲くことを確認しま
した。ここに、報告します。

付記：上記のことについて、浅井康宏先生に
ご意見をお伺いしたところ「ヌマツルギク
は、原産地では、開花は6～10月頃となっ
ていますから、我が国で夏に開花するのが古来
の性質で、最初、初冬に発見(開花)されたの
は、かえって季節はずれだったと思いま
す。」というご返事をいただきました。

編集後記

・今回はフロッピーで投稿してくださる方が
多かったので、編集の作業が楽でした。それ
にもかかわらず、発行が遅れたのは、ひとえ
に編集担当の怠慢のなせる業であります。

・次回の総会は横浜市こども植物園で1998
年2月28日に行われる予定です。詳細は追っ
て連絡いたします。予定をあけておいてく
ださい。

・神奈川県レッドデータ生物調査報告書は残
部がなくなりましたが、植物編は県博のホーム
ページで見ることがことができます。URL
は、<http://www2.infoweb.or.jp/KANAGAWA-MUSEUM/sizen/Kenkyu/kenkyu.htm>です。